

アメリカ旅行記（ニューヨーク州編）

岩 永 雅 也

去る4月9日より4月24日までの2週間、本センターの阿部研究開発部長、館助教授、塩崎助手とともに「短期高等教育研究会」（総合研究開発機構助成）の一員としてアメリカにおける短期高等教育、とりわけコミュニティ・カレッジの現状を視察、踏査してきた。筆者は研究会のメンバーである三浦清一郎福岡教育大学教授とチームを組み、主に東海岸方面の調査を受け持ったが、途中カリフォルニア州サン・ディエゴ市で行なわれたAACJC（American Association of Community and Junior Colleges）大会への参加や他のメンバーの予定変更のため、あの広大な北米大陸を計4回も横断する調査となった。

すでにアメリカのコミュニティ・カレッジについてはわが国でも数多くの文献が出され、様々な方向からの検討がなされている。しかしその多くは、先進的とみなされていたカリフォルニア州など特定地域の紹介や分析であり、「アメリカの～」と銘打つにはかなり問題があった。また、納税者に対するコミュニティ・カレッジのアカウントビリティをめぐる「提案13号」（1978年）の成立以来、カリフォルニア州でも他の地域でもコミュニティ・カレッジは大きく変化している。そうしたわが国にあまり知られていない地域や新しい動向を探ることが、今回の踏査のねらいのひとつであった。

調査団は、われわれのチームも含めて5チームで構成され、急ぎ足とはいえ、メキシコ湾岸地域を除く全地域に展開して資料収集活動やインタビューにとりくんだ。このMME研究ノートでは、その

活動のあらましを、裏話をまじえながら紹介することにしたい。

ニューヨーク州シラキューズ市

われわれはまずニューヨーク州中部の地方都市シラキューズ (Syracuse) 市にベースを構えた。ここにはかつて三浦氏がフルブライト基金による交換教授として一年間教鞭をとった名門シラキューズ大学がある。人口10万足らずのシラキューズ市自体は、名称からも察せられるようにイタリア系移民の町であり、現在でもイタリア系の人々が多く住んでいるところである。

大学は市域全体を見渡せる小高い丘の上に立っているが、ゴシック風の大学本部を中心に、いかにも由緒ありげな数々のホールが取り巻いている。立地からみる限り、シラキューズ市はシラキューズ大学の「門前町」といってもいいくらいの大学町である。



さて、羽田を発ってからほとんど休む間もなしに3便の飛行機を乗り継いでシラキューズ空港に降り立ったわれわれは、その日2回目の夜空を見上げながら、まず途方に暮れた。降下直前の機内放送で、“~Syracuse is now snowy, twenty-five degrees~”と告げられた時には、華氏の表示に慣れていないこともあって何とも思わなかったのだが、本

当に降っていたのである。日本の春の陽気になまっていた体が、氷点下の冷気に一遍で締まった。途中乗換えたサン・フランシスコ空港の気温が90°Fであったことをおもいだし、改めて北米大陸の大きさの一端に触れた気がした。

ひと気のない空港には、三浦氏のシラキューズ大学時代の同僚であった、Hiemstra教授が待っていてくれた。夜中の11時、雪の中をいともわず郊外の空港まで出迎えてくれたきさくな教授は、50歳前半の顔中がグレイの髭におおわれた長身の紳士であった。三浦氏によれば、全米成人教育学会の会長もつとめた大物だということであったが、近寄りがたさというものとは無縁の好人物であった。

空港のレンタカー事務所でフルサイズのオールズ・モビルを借りたわれわれは、教授の案内で雪の中を何度も左車線を走ったり路肩を走ったりしながら、なんとかダウン・タウンにあるホテルの最上階のスイート・ルーム(！)にたどりついた。驚いたことに、教授は「疲れただろう、ゆっくり休みなさい、Good night！」とは言わず、はりきって「さあ、打合せだ、こちらへ来たまえ」と告げたのである。かくて、深夜0時から1時間以上に及ぶ打合せ会が始まった。

3人の男性がホテル最上階のスイート・ルームで夜っぴて相談をしているという図も十分に奇異であるが、教授の用意してくれた現地でのスケジュールはそれ以上にわれわれを驚かしてくれた。何と次の日から毎日朝8時開始夕方5～7時終了という予定が組まれていたのである。それによればわれわれは3日間に計6つの大学・短大等を訪問することになっていた。会う教育関係者の数は30人以上になる。その6つのキャンパスについて詳細に説明をし終えた教授は、「完璧な計画である」というわれわれの感謝の言葉を聞くと、「私もそう思っている」と言い、ニコニコ帰ってゆかれた。テーブルの上には“Have a fantastic sweet night!”のタググ…。午前1時を過ぎていた。

次の日はまずCazanovia Community Collegeをおとずれた。キャンパスは美しい氷河湖のほとりにあり、1824年創設の歴史ある私立短大である。3年前まで女子だけを募集していたのだが、

150年以上も続いた伝統を放棄して男子にも門戸をひらき、現在は共学校になっている。

キャンパスは地域社会にとけこんでいて、まわりの民家と区別がつかない。幾つもあるホールはすべて2階建てで、その多くがレンガ造りである。現在でもやはり女子学生が圧倒的に多いが、彼女達はキャンパス内ですれちがうと例外なくにこやかに声をかけてくる。日本の女子大のキャンパスを歩く時のような妙な居心地の悪さやゾクゾクするような場違い感は全くと行っていいほどない。国民性の違いといてしまえばそれまでだが、その後いくつかのキャンパスを見たささやかな経験から、この短大のアト・ホームな雰囲気は、ほとんど白人だけのキャンパスであるということで保証されているのではないかと思いついた。この短大には驚くほどマイノリティーがいないのである。われわれがいた約5時間余りのあいだ、出会ったのは日本人留学生1人と黒人学生1人、それにダイニング・ホールの黒人従業員2人の4人だけであった。それにはいくつかの原因が考えられるが、まず教育コストが非常に高いこと(年間1万ドル近い)、そして地域性や150年の歴史が新しく参入してくる者に排他的に作用することなどがあげられるだろう。

Cazanovia では10人近い関係者に会ってインタビューをし、キャンパス全体の見学をしたが、最も印象に残ったのは Schneeweiss 学長と経理担当の Mezzanini 氏の話しであった。学長は教育者というより大学経営のエキスパートであり、中米某国の大学システム創設に参画したこともあるということであった。話しの内容も、どうしたら他の短大等との競争のなかで顧客を確保し、財源を安定させ、さらに教員組織を懐柔して発展的に組織運営ができるか、ということに終始した。われわれが訪れた時にも自らパソコンを操作して仕事の真最中であったが、話しの内容からも非常にエネルギッシュなエグゼクティブという印象を強く受けた。

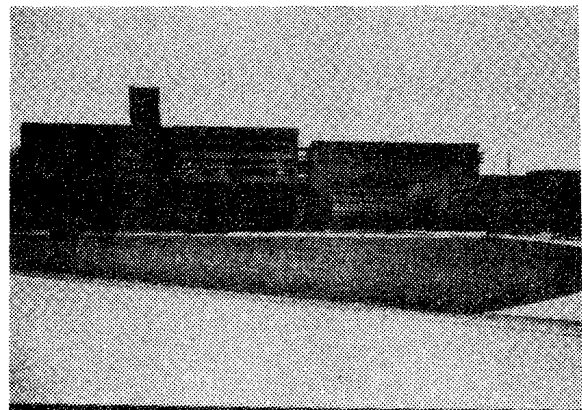
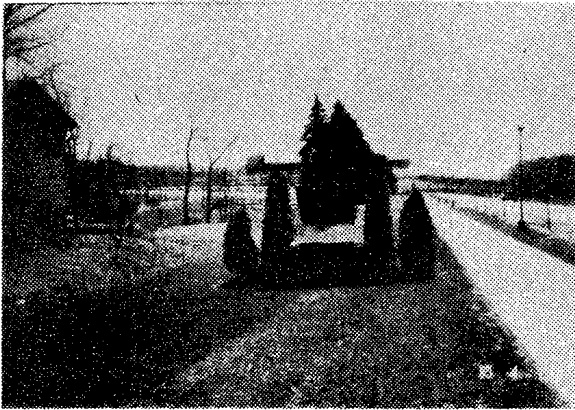
経理担当者は、もと公認会計士をしていたというだけあって、数字いじり以外に趣味はないといった風の事務官であった。初めうさんくさそうな態度で対応していた彼も、バランス・シートの説明に入るころからがぜん活気を帯び、この1年自分の努力でどれだけ黒字を出し、内部留保金として貯えたかを得意そうに話してくれた。学内のホールを結婚式や会議に賃貸したり、キャンパス周辺の路上駐車車輛から駐車料を徴収したりという「きめの細かい」運営を心掛けているそうである。まさに学長の右腕としてうってつけの有能なマネージャーであった。

ただし当然のことながら、こういった強引ともいえる経営方針は、必ずしも周囲に好感をもって受け入れられているわけではない。まず第一にファカルティー・メンバー、つまり教員の側からの反発がある。じつは先のHiemstra教授の夫人もこのCazanoviaで家政学を教えているのであるが、彼女によれば同僚は全て学長に反感を感じているということであった。彼には教育者としての哲学も理想もないというのである。もうひとつの反発は、地域住民からのものである。数年前まで地域と短大は何の軋轢もなく助け合ってきたのに、その信頼関係がこわされたという不満が各方面から起こっているのである。

この私立短大の経営のありかたは、上にあげたような周囲からの当然予想される反動があり、そのままではなかなかなじまないかもしれないが、今後の日本の短大経営に、ある側面で重要な示唆を与えるものといっていよう。

ニューヨーク州ではさらに5か所を訪問したが、そのうちここでは公立のCommunity College of the Finger Lakes (CCFL)を紹介しよう。Finger Lakesは、五大湖に流れ込んでいた氷河がそのままとけて5本の指のようになった氷河湖群であり、近隣では文字通り「指折り」の観光地になっている。CCFLはそのほと

りに広大なキャンパスを持って立地している。これでは勉強するよりボーッと芝生で寝ている学生ばかりになるんじゃないか、というのがわれわれの第一印象であった。



案内してくれたのは、教務担当 Dean の Cable 氏で、彼は先の私立短大の経営者陣とくらべるとまったくの教育者、研究者に見えた。彼は当面している短大経営上の問題点として、(1)学生の確保(2)協力企業等の確保(3)教職員組合との対応、の3点をあげた。(1)と(2)については現在のところなんとかうまくいっているとのことであったが、(3)については非常勤のチューターの組合まで結成されるなど種々の困難に直面していることであった。インタビューのあとでCable氏自らキャンパス案内をしてくれたが、途中教職員に会うたびに明るくファースト・ネームで呼びかけ、体調などひとりひとりに尋ねていくその姿からは、組合対策に苦慮する管理者の気配りが痛いほど伝わってくるのであった。

ニューヨーク州のほんの一地方都市での実態を見ただけであったが、われわれがそこで受けた印象は総じて明るいものではなかった。背景にはまず第一に企業の南部サン・ベルト地帯への転出による地域経済自体の低迷がある。第二にそれにもなう動きであるが、人口の南部への移動による若年人口の減少がある。特に都市遠郊に立

地している短大等では存続の危機さえ感じられたのである。第三にはかなり早くから先進的地域であったことで早期に社会の各部分に様々なシステムが成立しており、それが硬直化してその後の変革を妨げていることがあげられる。ユニオンもそのひとつの典型と考えることができるだろう。

北部にはフルサイズあるいはそれ以上の大型車が多く日本車は少ない。通勤時間にそれらが道路を埋める光景は壮観である。しかしよく見るとそのどれもが融雪剤の影響でボロボロに錆びている。トランクを通して向こう側が見えるような車も少なくない。ワックスをかけるなどというのは論外である。そういった、ハイグレードではあるが、ほうほうに痛みがきていて、しかもまだ走らなければならない車の群れが、何よりも雄弁に現在の北部の置かれた状況を語っているように見えて仕方がなかった。(つづく)